

4.1 分節音の表記法

音声を正確に記述する手段としての音声記号 (phonetic symbol) が存在し、多くの音声学者がこれまでに様々な記号を用いてきた。しかし、我流の表記が混在すると、正確に記述・伝達するという目的が達成されなくなる。そこで、世界各国の音声学者が参集する国際音声学会 (International Phonetic Association) で世界的な標準となる記号が定められている。これが**国際音声記号 (International Phonetic Alphabet)** であり、略称のIPAで知られている。

音声の最も小さな単位を**音素 (phoneme)** と呼び、その言語の母語話者が概念的に同一のものとして認識する音声のことである。IPAでは、この音素を基本単位とし、それぞれを表記できるように記号を定めている。音素は、スラッシュ//で括られた**音素表記 (phonemic transcription)** で表す。音素は概念上の単位であるので、実際に発音される際には、若干ずれた音声として実現されることが多い。例えば、英語の音素/p/は、強勢のある音節の頭に生じる場合には強い息の排出を伴い、[p^h] と表記される音 (帯気音) となる。このように、実際の音声は角括弧[]で括られた**音声表記 (phonetic transcription)** で表される。なお、IPAではbroad transcription (= phonemic transcription) と narrow transcription (= phonetic transcription) という用語が用いられている。

母音は、舌の高さ (tongue height)、舌の位置 (tongue position)、唇の丸めの有無 (lip rounding) の3つの要素に基づいて分類し、それぞれに記号を配当している。子音は、調音位置 (place of articulation)、調音方法 (manner of articulation)、有声性 (voicedness) の3つの要素により分類し、調音可能な音声に記号を配当している。母音・子音に共通して、その音を音素として持つ言語がない場合にはIPA記号の配当がない。つまり、IPA記号のない音声は世界中のどの言語でも音素として存在しないということである。未知の新たな言語が発見され、或いは音声変化によって新たに音素として存在することが確認されると、随時記号が追加されてきた。現在、IPAでは、100余の記号が登録されている上、音声表記を行うために、前述の帯気を表す[p^h]を含む補助記号 (diacritical symbol) が指定されている。

IPAは、既存の字母 (alphabet) を基本として用い、不足するものについて、別の字母から借用したり文字を変形させたりして補うことにより記号を創出している。IPAには印刷に不便な文字 (タイプライターでは確実に打てない、パソコンでも従来のフォントには含まれていない文字) が多いことから、実際の使用に於

いては簡略版を用いることが多い。例えば、日本の辞書などは、基本的にはIPAを用いつつ、英語のR音である歯茎接近音 [ɹ] 或いは反り舌接近音 [ɻ] について [r] の記号で代用し、印刷の便を図っている。[r] は、IPAでは本来、歯茎震え音を表す記号で、これは所謂巻き舌のR音であるが、日本語や英語には存在しない音であるから、代用しても混乱は起こらないのである。

アメリカの言語学者たちは、伝統的に独自の音声記号を用いてきた。IPAとの主な相違点は、軟口蓋接近音に [y] (IPAでは [j]) を用い、後部歯茎音に [s̠][z̠][ç][j̠] (IPAではそれぞれ [ɟ̠][ʒ̠][ç̠][dʒ̠]) を用いることである。前者はアメリカ英語に於ける音価を採用したもので、後者はタイプライターで打つ際にキーボードにある文字にバックスペースでカロン (˘) を重ねれば良かったので便利であった。母音の記号も、既存文字にウムラウト (¨) などを付して、同様にタイプライターで入力可能な記号となっている。但し、アメリカ英語の子音の音価を採用しており、その他の言語を用いる者には解りにくい上、UNICODEフォントも充実してきた今、アメリカ以外ではあまり用いられていない。因みに、一般的な欧文フォントでは、Centuryではまだ一部入力できないIPA記号があるが、Times New Romanでは全ての記号を使用できるようになっている。

既存文字に依らず、新たな記号を創出した音声学者もいた。Alexander Melville Bellによって考案され、Henry Sweetによって改良された「視話法」(Visible Speech) が有名である。Bellは、修辞学者として聴覚障害者への発音教育を研究し、その成果をまとめたのがBell (1867) である。そこで用いられた記号は、調音器官の働きを表し、世界の言語音を表現できるという点で、単に聴覚障害者教育のための記号というだけではなかった。音声学者のSweetは、その記号を改良し、オーガニック (Organic) と呼んでSweet (1890) に用いた。オーガニックとは、「(音声) 器官に基づく」の意味で、ラテン文字に基づくローミック (Romic) との対である。母音の記号は縦棒を基本とした形であり、鉤を上下左右に付して舌の高低・前後を示す。子音を表す記号は、調音方法によって形が決まっており、その向きや変形によって調音位置を区別している。因みに、電話の発明で知られる Alexander Graham Bell は Melville の次男である。

なお、本項は赤塚・土居・久保田 (2020) の一部を抜萃し、改変したものであることを書き添えておく。

(土居 峻)